

書評

西井 正弘

『入門 人間の安全保障  
—恐怖と欠乏からの自由を求めて』

長 有紀枝 著、中公新書  
2012年12月刊、274ページ



シリア内戦が続き、多数の死傷者が出て、化学兵器の使用も疑われている。私達や各国政府は、どのような行動をとるべきなのだろうか？

国連開発計画 (UNDP) の『人間開発報告書』(1994年)で提唱された「人間の安全保障」(human security)の発展を通じて、国際関係を捉える内容豊富な入門書である。

導入部分において、冷戦後主権国家が階層化し、主体(actor)が多様化したことを指摘する。国連の組織と活動(PKOなど)を概観した上で、安保理常任理事国の政治的決定が客観的基準なしに行われていることにも言及する(第1章)。また、戦争の違法化や国際法の歴史、国際人道法と核兵器の関係について触れる(第2章)。

総論部分では、本概念を提唱したUNDPの戦略性、日本とカナダの外交政策における位置づけの違い、人間の安全保障委員会報告書(2003)における概念の精緻化や、人権との相互補完性を指摘する(第3章)。この概念の担い手として、国家以外に、軍隊・軍事組織、国際組織、NGO、企業、メディアが関わっていることに触れる(第4章)。

各論部分では、人の移動・難民問題、通常兵器の蔓延、子ども兵、紛争ダイヤモンドとレアメタル、貧困と児童労働、感染症、ジェンダーに基づく暴力、自然災害といった、主に途上国の諸問題につき具体例を挙げて説明する(第5章)。ミレニアム開発目標(MDGs, 2000)の進展状況を検証し、国際法については、特に、国際刑事裁判所に高い評価を与えている(第6章)。

人間の安全保障とは別の系譜から登場した概念が、「保護する責任」(Responsibility to Protect; R2P)である(第7章)。ソマリア、ルワンダ、旧ユーゴスラビアの内戦で、PKOの限界が明らかとなり、カナダ政府が設けた委員会報告書(2001)のR2P概念の発展をたどる。著者は、武力行使を伴うR2Pが、国連憲章の枠を超えて広がる可能性を否定しない。しかし、「予防する責任」に重点があることを理由にR2Pを評価している。ところが、2003-09年のスーダン・ダルフルでの政府軍による空爆や民兵による殺害により多数の国内避難民・難民や死者が出たにもかかわらず、武力でジェノサイドを止めようとする各国政府の動きはなく、他国民を救うために自国民を犠牲にはしないと云う。

東日本大震災に触れ、被害が弱者に集中することや、官を補完する市民団体の役割を紹介し、先進国でも「人間の安全保障」が有効な概念であるとする(第8章)。

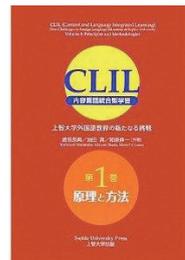
人間の安全保障の新規性は、国家自身が主導したこと、国家以外のアクターの積極的な役割を認めたことにある。サヘル(サハラ砂漠南縁)の子どもたちが「人道危機に陥らず、脆弱な状態に止まれるよう」国際社会の食糧支援が必要だという国連事務次長の注目すべき言葉は、本概念が、社会的弱者の立ち直りを助ける概念であり、援助を必要とする側に立って支援方法を考えるべきであることを示唆する(終章)。

市民が課題に立ち向かう時、過去及び未来に目を向け、人々に思いを馳せ想像することは重要であろう。だが、人間の安全保障の実現方法についてはやや具体性に欠ける。現実の事態の複雑さを認識している著者にこそ、その意見を期待したいと思う。

寺 秀幸

『CLIL (内容言語統合型学習):  
上智大学外国語教育の新たななる挑戦  
第1巻 原理と方法』

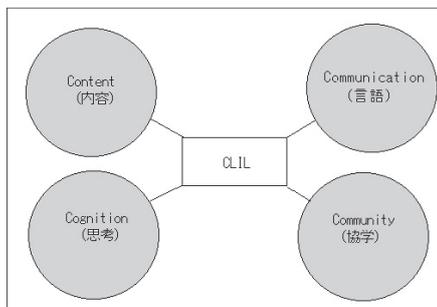
渡辺良典/池田 真/和泉伸一 共著  
上智大学出版、2011年4月刊、200ページ



いったい「内容言語統合型学習」(CLIL)とは何なのだろう。何らかのコンテンツの学習を通して言語を学ぶ方法であるという。筆者の勤務する大阪女学院大学・短期大学では「内容中心指導法」(CBI: Content-based Instruction)に基づく英語教育を行っている。いったいどこが違うのだろうか。そんな疑問を抱いていた時に出了のが本書である。タイトルが示すように、これは上智大学で実施された英語教育プログラムを契機として書かれたCLIL(Content and Language Integrated Learning)の解説書であり、同時に、この分野の入門書の先駆けとなるものである。関連する基本概念が丁寧に説明されている。

本書によると、CBIとCLILの大きな違いは、前者が米国で発展した第2言語指導法であるのに対し、後者が欧州で発達した外国語指導法であるということにある。欧州産であるCLILは当然、CEFR(Common European Framework of Reference for Languages)やその背景にある複言語主義と同じ方向性を共有している。求めるのは必ずしも母語話者レベルの言語能力の獲得ではなく、相互の言語の容認であり、状況と目的に応じた言語能力の獲得である。

本書は、啓蒙的である。CLILの中核概念である4つのC(Content, Communication, Cognition, Community)から成り



CLILの「4つのC」本書p5より

立つマトリックスの中にシラバス・教材・指導法などを置くと、どのような状況でどのような指導が必要なのか手が取るようにわかる。また、教師は自分に足りない知識や技術がたちどころにわかるのである。

ただ、一般向けの書であるためか、やや物足りなさを感じる点もある。たとえば、インプット理論などの第二言語習得の概念や技術が紹介されているが、外国語教育中心の日本の環境でどのようにそれを機能させるかの考察もほしい。また、上智大学の学生と同等の語学力を持たない学習者に対してこれを成功させるためのヒントも聞きたくなる。

近年、我が国でもCLILへの関心が高まりつつある。CLILが要求する高い指導能力は教師を大いに刺激するであろう。また、CLILの背景にある社会的方向性や共通基準は、ともすると具体的な習得目標を明示しない我が国の英語教育に大きな示唆を与えるであろう。